



ジェントルハート通信

No.60
2018年秋号

発行:NPO法人ジェントルハートプロジェクト 発行日:2018年10月15日
URL: <http://npo-ghp.or.jp> Tel. +Fax. : 045-845-3620(小森)

定価:100円(会員無料)



「新任理事の紹介」

理事 小森美登里

皆様にお届けしているジェントルハート通信も今回で60号という節目を迎えました。個人的に私は遺族となって20年、また法人の活動開始から16年目となる訳ですが、その間には様々な出来事がありました。

娘の自殺直後は自分が今後生きていく意味を見出す事がとても困難な状況にあり、「死ぬためにはどんな方法があるだろう?」と日々考えていました。それでも、「死ぬ前にしなければならない事がきっとある。それをしなければ天国で香澄に会えない」と自分自身に言い聞かせながら、最初は夫婦2人で手探りの中、小さな活動を始めました。

その後NPOとなったのですが、きっかけはその小さな活動を見つけてくれた人との出会いでした。そして活動の幅は広がっていき、学校での子どもたちへの講演や教員研修、国への申し入れ、また、いじめ防止対策推進法成立までの流れを活動を通して間近で見守る事まで出来ました。言うまでもなくそれらの経験は、多くの方々との繋がりの中で得る事ができたものです。

今思い出してもとても辛い事ですが、遺族となった直後、人の言動によって深く傷つく事が多々ありました。しかし、その後の活動を思い返すと、私は人に支えられる事によって、「生きなければならないのではないか?」と思い直す事ができ、今の活動へと繋がっている事を改めて実感しています。でも、以前に支えて頂いた皆様と今も繋がり続けているか?と言うと、実際にはそうでないこともあります。感謝の気持ちは今でもありますが、新たな出会いの中で疎遠になってしまった方が多くいることも事実です。人生は出会いと別れの連続なのかも知れないとの思いを胸に秘めつつ、前進を続けることが残りの人生だと思っています。

そしてこの度当法人としても、この新たな出会いの中から新理事3名を迎えることになりましたので、ここで紹介します。

◇ まず一人目は、葛西剛さんです。

2016年8月、青森市立浪岡中2年の葛西りまさん(13)がいじめを訴えて自殺した事件のご遺族です。黒石よされ写真コンテストの手踊りの写真で最高賞を受賞した後に、その写真が自殺したりまさんである事が判明し受賞を取り下げた事で再度報道で取り上げられた事案です。葛西さんとの出会いのきっかけは、私が青森での講演時に、会場へご家族でお越し頂いたことでした。

りまさんが亡くなった直後でしたので、その憔悴ぶりは今もはっきりと覚えています。それでも何かしなければならぬ、という強い意志を感じました。葛西

さんは当法人の勉強会などに何度もご参加頂き、この通信へも掲載させていただいていたので既にご存知の方も多いかと思えます

◇ 二人目は、大森冬実さんです。

2014年7月、八戸北高校2年の大森七海さんの遺体が青森県八戸沖で見つかりました。

青森県教委の審議会(第三者調査委員会)は14年12月、「自殺はいじめが直接の原因ではなく摂食障害などの複合的な要因。」とされましたが、娘の死が今後の対策に生かされない事に納得のいかなかった大森さん夫妻は再度の調査を要望し、その結果、1回目の内容を覆す事となりました。大森さんとの出会いのきっかけは、当法人が主催した青森でのシンポジウム会場に、ご夫婦でお越し頂いたことです。私はこの会場にこのご夫婦が来てくれることを切望していましたので、姿を見た時にとっても安心したことを覚えています。私たちと出会って、この問題の現状、そして対応策を考える一つのきっかけになった、と言ってもらい、この活動をしていてよかったと実感しました。

◇ 三人目は、中谷加代子さんです。

2006年8月28日 山口県での高専生殺害事件のご遺族です。山口県周南市にある高等専門学校の研究室で、娘さんの歩さんが他殺体で発見されました。犯人は、殺害した歩さんを強姦しその後自殺しました。中谷さんとは、やはり私が山口県での講演時、中谷さんが主催者サイドのスタッフとして私を会場や空港までご自身の車で送迎してくださり、その道中色々とお話しさせて頂いた事がきっかけでした。

このように、活動を続ける中で生まれるご縁はとも多く、そのことが今後の法人の活動のみならず、いじめ問題の今後に深く影響していくものと思えます。

心と体を深く傷付けられ、私たち大人より一足早く天国へいった子どもたちが作ってくれたこの縁を大切にして、今後も新任理事と力を合わせ「これをやりたい!」と心が動くことを一つずつ行動に起こしていこうと思っています。皆様の応援をよろしくお願い致します。



◆ジェントルハートメッセージが開催されました

去る8月25日から9月1日まで、東京都人権プラザ主催の「心と体を傷つけられて亡くなった天国の子どもたちのメッセージ」展に協力させていただき、ジェントルハートメッセージの展示とトークプログラムを開催いたしました。今回はその中からトークプログラムでコーディネーターをして頂いた加藤彰彦先生のお話を掲載させていただきます。

【加藤彰彦先生（沖縄大学名誉教授）のお話】

展示されていたパネルの子どもたちひとりひとりのお顔を拝見していると、新聞の記事などでお顔を見ていた方もいっぱいいらっしゃる。みんないい顔で本当にみんな優しい子。そういう子どもたちが何で亡くならなければならないのか、本当に辛い思いがあります。

私自身の経歴を少しお話しさせていただきますと、私は最初に小学校の教員をやっている、その頃はすでに不登校が始まっている時代でした。子どもたちとの関係、家族との関係について、非常に悩み、その後日本中を放浪して歩くという旅をしました、それから横浜にある寿町（コブキョウ）という日雇い労働者の町に来ました。本当に貧しい町だが、その中でみんな一生懸命生きていました。周りから非難される状況の中にあっても、その中にいる子どもたちが色々なことを言いあっていました。時には大人たちと喧嘩もするが、実に自分たちの思いをストレートに言っていました。悪口も言うけれど、みんなが本音でしゃべれる。そんな関係がスラムの町の中にあり、「ここに人間が生きてる」という感じがあって、こういう関係がなぜ一般社会の中で出来ないんだろうかと思っていました。その後その場所で、路上で寝ている人たちを他の地域の青年たちが殺してしまうという殺傷事件がありました。それから子どもたちの実態を知りたくて児童相談所に勤めました。10年ほどいたのですが、大変な状況で、横浜でも子どもたちの自殺がたくさんありました。何故そうなったのかという歴史をじっくり見直したいと考えて、日本の中の子どもたちの歴史を、大学の先生方たちと一緒に勉強会をずっとしていました。それが一つの縁で横浜市立大学というところで教員を

することになり、子どもの福祉を中心にして、地域の福祉の問題をやり、そして60歳の時に沖縄に行きました。

つまりいまの差別の基本の姿が全て沖縄にあるという思いがしてきたのです。沖縄での暮らし、あれだけ悲惨な出来事、人の命が奪われるということでは一番極端なものは戦争です。

憎み合い、人を殺し合うすさまじい状況の中においても、親しさの中でみんなが一生懸命生きていました。

そのことを自分はもう一回取り戻したい、見つめ直したいということで、今日の5人の方のお話を伺い、ある意味でものすごい共通項を感じました。

最初にそこから話します。

私は沖縄で14年間暮らし、昨年久々に戻ってきました。私は「人は何のために生きるのか」ということが沖縄にいる間にだんだんつかめてきました。

「人は何のために生きるか」私なりの認識ですが、これは2つしかなかったんです。

生きる目的は2つ、一つめの目的は間違いなく生きることなんです。生きることが出来ないと生きる目的なんてあり得ない。

生きることが生きる目的なんです。

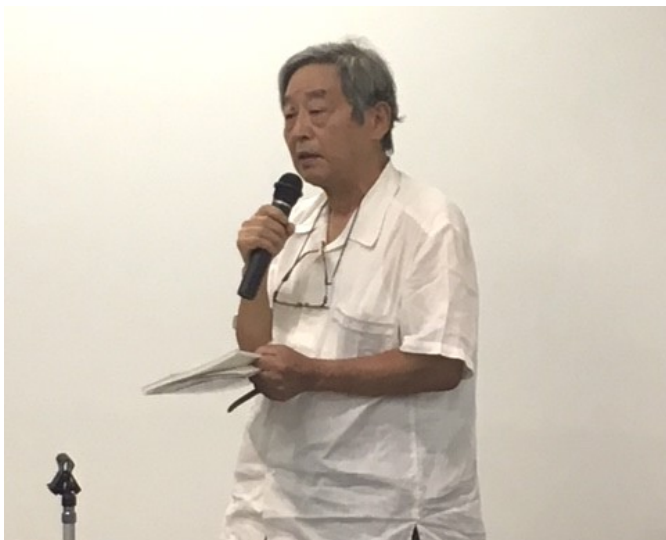
問題なのは、生きることが苦しくなったときに、人間はどうやって生きることが出来るかということで、沖縄でも家族を失って1人だけ助かった子どもや、親戚はみんな亡くなって1人ぼっちになったおじいさんもいる。その時どうやって生きたかということを知っていたが、皆さん『人間というのは辛いことがあったときは一人では生きられないよ』『一人になったらみんな死ぬことしか考えないよ』と、亡くなった人の所へ帰ろうとしか考えないと言います。

『生き抜いてきたのは仲間がいたから』『相手のことを自分のことのように思っ一緒に話をしてくれる』という共に生きてくれる仲間がいたから生きてきました。

つまり、生きる目的の一つは生きることだが、生きること一番大事なことは辛く苦しく悲しい体験をした時に、その自分と一緒に生きてくれる仲間がいる、自分も他の人の仲間になって一緒にその人を支えてあげられる、そういう仲間が生きていること、仲間と共に生きていく。これが生きる目的です。

「共に生きていく仲間がいる」ということが実は生きる目的なんだというのが一つです。これは沖縄ではっきり教えていただいたことです。みんなが一緒に生きていること。

例えば離島に行くと、若い人たちがどんどん島から





出て行き、お年寄りだけになってしまい、次の時代が作れない。その島に若い人が来て子どもが生まれてくると『よかったなあ、子どもは宝物だ・神だ』と言うのです。『ぬちどうたから』（命は宝）と言いますが、新しい命そのものが全ての基本なんです。

つまり、子どもたちが生まれていく、そしてその生まれてきた子どもたちが無事に育っていく。このことをきちっと保証していくこと、お互いに子どもたちが安心して育っていける様な環境を作ること、子育て（次の世代を育てること）、これが生きる目的だということなんです。

沖縄では、あの基地の前で座り込んでいるおじいおばあもたくさんいます。何のために座り込んでいるのかと聞くと、一様に『次の世代の人たち、子どもたちや孫たちにこんな辛い思いをさせたくない。自分だけは命をかけてもこれを守るんだ。安心して生きられる沖縄を作るんだ』とおっしゃっているんです。

生きる目的はその2つですね。

これは政治、教育、福祉の目的であり、全てそこに帰着する。

みんなが安心して生きられるような制度を作っていく、あるいは次の子どもたちが安心して育っていけるようなシステムを作っていくことが一番大事なことです。

今日調査委員会の話がありましたが、一番重要なことは当事者である被害者の家族や兄弟の話を本当に受

け止めてくれること。そして、もし可能であれば加害者についても、何故そうしたのかをとことん聞く。そのことが調査委員会の本質的な意味だと思います。

少し話は飛びますが、オウム真理教の事件で、高学歴の人たちが何であそこまで行ってしまったのかが解明されないまま、国家権力によって12人の方が処刑されました。

本当の意味での対話、本当に心と心で本音を語り合うことがないと、人と人との関係性とか、これから新しいものが生まれるということはないと思います。

また、今日お話しをされたお母さんたちとも共通しますが、子どもさん自身が手紙等で『大大大好き』とお母さんのことを言っていた言葉です。これは生きていく為の一番の原点で、一番大好き同士で生きていく。もちろん間違ったり、喧嘩したりするんですけども、翌日には仲良くなっている。という流れがありました。

他方、間違いや喧嘩がずっと続き、ストレスがずっと子どもたちの中に蓄えられていて、自分の本音が語れない。本当は何がしたいのか？悲しみや辛さのストレスもあり、それを他の子をいじめることによって発散するということにしか向かなかった、ということの意味を取り上げていくためには、本音でしゃべれるという関係をどこにつくるのかという事だと思います。

しかし子どもたちは、苦しいということをお親に心配をかけないように見せません。その気持ちを出せる仲間や出せる人たちがいること、生きる目的である本音で語り合える様な仲間が学校の中にも家庭の中にも地域の中にも居て欲しいが、そういうことが出来ない状況があります。

親として出来なければ知り合いや地域や、いろんな人たちの中にそういうことが受け止められるような場所、環境を作る必要があると思います。

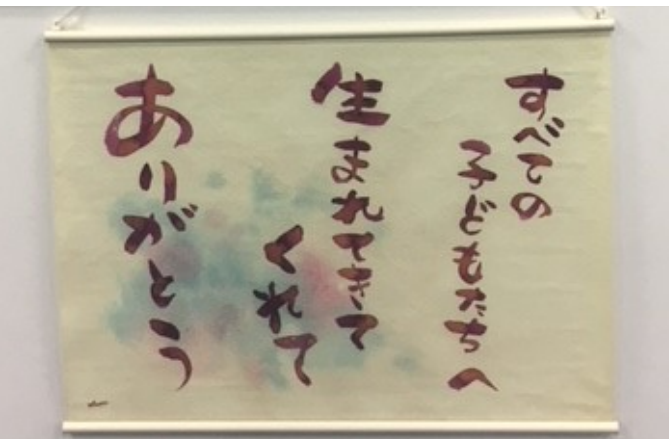
私はいじめの問題は、ある意味今の社会自体がこういうものを作り上げてきたと思います。

今のスポーツ界もオリンピックを前に様々な問題が出てきています。オリンピック優勝という目標に向かって動くと、若い人たちが自分の本音で『楽しみたい』とか『ゆっくりやりたい』といったことが言えず「国家のため」とか「先輩・監督のため」とか「親のため」に動いて行ってしまいます。

ですから本音で子どもたちが自分の思っていることを言えるという環境というか人間関係が今問われているのです。

私はいじめの問題というのは、ひとりひとり個別の問題をじっくり、自分の物語をちゃんと出して語れるような、そしてその公認されない悲しみや辛さというのがみんなに伝わっていくような環境を作っていくことが大事なところだと思います。

私の娘も小学校の時いじめられていました。他の女の子が男の子にいじめられていて、それを先生に伝え



たところ、『チクった』ということで、そのあとその女の子はいじめられなくなっても、私の娘はずっといじめられていました。

小学校4年生の頃だったんですけど私は全然知りませんでした。いつも一緒に風呂に入っていたのに一緒に入らず皆が寝静まってから一人で入っていたのでおかしいと思い『お父さん入るぞ』と言って開けたところ、体のあちこちが紫色に腫れ上がっていてびっくりしましたし、すぐ直感しました。

「いじめられて閉じ込められていた」ということがあり、娘は『絶対先生に言わないで、先生に言うともっとひどくなる』と言っていました。翌朝先生に話をしました。その時に『絶対に言わないでくれ』と先生に何度も言いましたが、そのあといじめた子たちを呼んでみんなを叱り、『お父さんが来たんだぞ』と言ってしまいました。そのためにしばらく学校に行かなくなりました。

子どもたちが通う保育園、幼稚園、学校の先生方が、子どもたちに寄り添うことの本当の意味、あるいは子どもたちの本音が引き出せる関係をどう作るかということ、親身に考えなければならない。

しかし、先生方はちょっとでも成績が低いと何か色々あるみたいで、先生方自身も自由ではなく、いじめられている環境にあるということなんです。

ですから私たちひとりひとりも本音で自分の思っていることを身近な人たちとともに語り合っていくことが、いじめの最も基本的な流れということになるのではないかと思います。

私は今日の話は最後には命の問題になると思っています。命とは何かということ。

東京大学に大田堯（たかし）先生という教育学の先生がいらして、その先生が『最後にたどり着いた教育学の一番の根本はまちがっていた、教育というのは命の問題を軸にして考えなければいけなかった』とおっしゃっていたんですね。

命には3つの特徴があり、一つめは、命はひとりひとりみんな違うんだということにきちっと気付くこと。そこから子どもたちに対応していかなければならないということ。

2つめは、命はもともと自分が育っていく力を持っている。これをやりたいとかこれはやりたくないといったことだけでなく、みんな持っている。にもかかわらずまわりが一方へ引きずっていくので、子どもたちが本来持っている命の種（ひまわりはひまわりになるろうとし、犬は犬になるろうとし、人間は人間になるろうとしている）、優しい心をみんな持っていて、そのことをちゃんと育てていく事が大事だということです。

3つめは命というのは豊かになるにはいのちと出会わなければだめだということです。命と出会うということは、本当に自分の本音で生きている人同士が出会っていくことの中で子どもたちの命は育つ。だから教師はもっと本音を出さなければならない。本音で生きなければならない。自分がこういうことでやろうと



思ってきたことをちゃんと出して、子どもたちの夢を聞きながら一緒に生きていくということが必要だと思います。

沖縄で『どんなに辛くても、絶対なんとか生きていく』『絶対生き抜いていくんだ』という思いを学んだわけですが、そのためには仲間がいる、どんなに小さくても仲間がいる。そして同じような思いを持って一緒に生き抜いていく人たちがいる。地域の中で、学校の中で、職場の中で生まれていく。その小さな集まりを一つずつ作りながらつなげていくことが大事だと思います。

沖縄の離島で、そこのおばあ（おばあちゃん）が『満ち潮と引き潮を知ってるか？』『満ち潮ってどうやって来るのか知ってるか？』と聞いて来ました。僕は『ずっと向こうから津波みたいに来るんじゃないですか』と答えると『よく見ておきな』と言われたので、ずっと見ていたんです。すると、なんと向こうから来るんじゃないかと、小さな水が下から湧いてくるんですよ。そしてその水たまりと水たまりの近いところが繋がって広くなるんです。あちこち少しずつ広がってきて、3分の1くらいを超えたあたりですごい早い勢いでぐーっと繋がって、気がつくとも海なんです。その時にそのおばあが『大きな海は皆こうして見てる』『時代が変わるとい時は、ちゃんと下から水が湧いてきて、それが繋がりがあって海になっていくさあ』って肩を叩かれたことが今でも忘れられません。

ですから、どんなに小さくてもその一つ一つを私たちが作ろうとしているのです。そしてこの子どもたちが命をかけて残してくれた言葉を絶対に無駄にはいけないと思う。生きていくこと、そのことが僕らの仕事なんだよね。生きる仕事だと思うんだよね。それを精一杯やりながら、お互いが潰れないように支え合いながら、一つずつ制度を作っていく。というふうにやっていきたいと思っています。

今日皆さんとお目にかかれて本当に感激です。私も老人で、老人クラブの会長もしているんですが、子どもたちと一緒にこれからやろうと思って、色々なことを考えています。

◆毎日新聞主催のシンポジウムに参加しました。

毎日新聞が本年4月に特設サイト「ソーシャルアクションラボ」をオープンしました。その取り組みにおいて、小森美登里が取材を受けましたので、インタビュー記事の抜粋を掲載致します。

「いじめる子にやさしくする」

NPOジェントルハートプロジェクト 小森美登里さん

◆大人への相談は不安

【記者】子どものいじめに、親が気づかないケースがあると聞きます。どのような兆しがありましたか。

【小森】 みんなが同じようになるわけではありません。何事もないかのように時間通りに学校に行き、一日中つらい思いをしても顔に出さずに、普通に過ごす子もいます。状況はそれぞれ違いますし、いじめの相手と同じクラスにいるのか、部活にいるのかにもよりますよね。香澄の場合は、クラスも部活も同じ生徒だったので、相当な重圧だったと思います。隠し切れなかったのでしょうね。

【記者】子どもたちは、なかなか大人に相談したがいという話も聞きます。

【小森】 子どもが大人になった後で、「お母さん、昔、私がいじめられていたの知らなかったでしょ？」と聞かれるケースもあるようです。子どもたちは、悩みが深いほど、親子の関係が良いほど、「心配をかけたくない」「問題を持ち込みたくない」と考えます。家庭を、安全で居心地が良い場所として取っておきたいという心理も働くと思います。

とはいえ、もし「相談すれば必ず解決してくれる」という安心感が子どもにあったら、相談しようとするのではないのでしょうか。NPOの活動をする中で分かってきたのは、大人に相談することに対して、子どもたちが大きな不安を抱えていることです。

◆さりげなく解決する方法を大人は持っていない

【記者】子どもたちは、相談すると状況が悪くなると恐れていますか。

【小森】 子どもたちは、さりげなく解決してほしいんですよ。でも、先生に言うと大ごとになってしまうのではないかと不安を抱いている。私が講演先などで会った多くの子どもたちが、相談できないと言いました。さりげなく解決する方法を、大人は持っていないですよ。

例えば、加害者と被害者を呼んで、「無視したのか？」「されたのか？」と直接的に問い詰めたりする。被害者側の子は、その後が怖いから、つい「私は大丈夫です」と言ってしまうことがある。すると先生は、「本人が大丈夫だと言った」ということを、対応しなかった理由にするんですよ。

加害者に対しても、目に見えた行為だけを挙げて「自分がされたら嫌だろう。謝れ」なんて言うことが、心からの反省を促す指導になるのでしょうか。その子自身、何か苦しみを抱えていて、ストレスのはけ口として、いじ

めたのかもしれない。原因になったストレスを緩和しなければ、いじめ行為は止まりません。

なぜ、いじめたのか。加害者の背景を理解して「つらかったね」と寄り添うことが対策のスタートです。

被害者が望むのは、いじめ行為が止まることです。

心の傷を深めないように、少し距離を置いた方がいい時はありますよ。被害者が休んでいる間、学校をその子が安心して戻れる場所にしなければいけませんよね。

◆いじめ対応スキル 教員に研修を

【記者】「先生がしてはいけないこと」は、ほかにもありますか。

【小森】 教員研修を頼まれることが増えて、私の話を聞いてくれた先生方がそれぞれの学校に持ち帰れるようにリーフレットを作ったんです。そこにはしてはいけないこととして書いたのは、(1) 行為そのものを直接注意すること——と並べて、(2) けんか両成敗 (3) デイベート (4) 被害者を人前で心配したり、なぐさめたり、ほめたりする——の計四つです。大人がやってしまいがちでしょう。「全部やっていました」と打ち明けてくれた先生もいます。四つ目なんて、いじめられている子を心配して、守ろうと思ってすることですが、気をつけないと、どこで加害者が見ているかわかりません。先生にやさしくしてほしいと心の底から望んでいるのは、加害者自身です。自分が求めていることだから、嫉妬心が生まれる。いじめがエスカレートしてしまう危険があります。

加害者はそもそも相当傷ついている子が多い。そう考えて間違いないと私はみています。

【記者】 クラスでいじめが起きたら、教員は気づくのでしょうか。

【小森】 「分からないはずがない」と、複数の先生から聞いています。周囲の生徒も気づくので、担任の先生に報告していることも多いそうです。それなのに、多くの先生が間違った対応をしている。子どものサインを受け取っても動き方を知らないからです。

先生たちは、良いことは良い、悪いことは悪いと、線を引けばいいと思っているみたいですね。「子どもたちは、自分の行為がいじめだとは思っていないですよ」「悪気があるわけじゃないんですよ」などと言う先生も多いです。こんなことを言われたら、被害者はさらに傷つきます。ほとんどの子は、自分の行為がいじめだと分かってやっていますよ。それで相手が傷ついているのも分かっている。

いじめる子たちのなかには、「いじめなんかしてない」と言い張る子もいます。また、いじめを認めたとしても「あの子だって悪い」と正当化しようとする子もい

る。どちらも自分自身を守るためでしょうね。何の働きかけもなしに、いきなり心の底から反省する子はなかなかいないと思いますよ。

【記者】教員がいじめの対応について学ぶ必要があるのですね。

【小森】先生がいじめ対応スキルを身につけて、家庭と情報共有すれば、守れる命はある。まずは教員研修が大切です。ほかの生徒たちに何が出来るか提案することも、スキルがあればできますよね。大ごとにしなことが前提ですが、「いじめてしまう子に対して、みんなはどんなことができる？」と話し合うのもいいと思います。「Aさんがいじめられています。ホームルームで話し合しましょう」はだめですよ。そんなことされたら、いたたまれないでしょう？

先生同士で子どものころ、自分が大人に何を望んで、何に傷ついたかを思い出すと今、先生としてやっていること、いけないことが見えてくる。簡単でしょう？でも、大切なことです。

◆いじめは大人の問題

【記者】スクールカウンセラーの配置も始まっていますが、加害者の相談を受けられるといいですね。

【小森】そこも大人の働きかけが必要です。いじめている子には、「何かつらいことはない？ いつでもおいで」と語りかけてください。いじめについて話しかけるのではなくて。

カウンセラーの方々にも、学校に配置される前に、いじめについてもっと勉強してほしいです。今はいじめられた子の相談役ではあっても、いじめをなくす手立ては持っていない。いじめの勉強をしたカウンセラーが増えれば、各学校にある「いじめ防止対策のための組織」と連携して、いじめ対応スキルを身につけた先生を増やすことができます。

【記者】「加害者対策が必要だ」と小森さんが気づいたのはいつでしょうか。

【小森】不思議なことに、香澄が亡くなった後、かなり早い段階から、いじめ問題は加害者の問題だと思っていました。いじめた同級生の育った環境が分かってきて、その子たちを育てた親への怒りが大きかった。子どもが、人を死なせるまでの加害行為をするなんて……。裁判で、子育ての責任を追及したいくらいの思いでした。

いじめは子どもの間で起きますが、大人の問題です。大人が認識を変えなければいけない。「いじめくらいで死ぬのは弱い人間だ」なんて言っていたらだめなんです。被害者の責任を探すようなことをしても、解決の手立てにはなりません。子どもは大人に殺されているんだと思う。

子どもたちに話す時は、「やられたらやり返すという解決策は正しいだろうか」と問いかけます。やり返すと、さらに報復があって、トラブルがあつという間に大

きくなる。学級崩壊になることもあります。そうなる、元の教室に戻すことが非常に難しい。そう話すと先生も子どもたちも腑（ふ）に落ちて、「やり返さない学校にしよう」という機運が生まれるんです。

でも、親たちはなかなか参加してくれないので、講演を聴いていない親が「やられたら、やり返すくらいの強さが必要だ」なんて、子どもに教えてしまうと、子どもが苦しむことになる。学校と家庭の方向性を統一できないことも、問題解決を遅らせていると思います。

◆意図せず傷つけたら、まず「ごめんね」を

【記者】親、教員以外の大人も、何かできることがありますか。

【小森】加害者を見つけたら、やさしくすること。それしかないと思う。加害者の話を聞いて、「つらかったね」と言えるくらいの関係になれたらいい。家庭の中はなかなか変わりません。ネグレクト（育児放棄）するような親が、急に愛情いっぱい子どもに接するようにはならない。だから、自分を気にかけてくれる友達や先生、大人の知り合いがいれば、加害者にとって救いになるかもしれないのです。

一方で、意図せず人を傷つけてしまうことが、誰にでもあります。そんな時、「あなたの方が悪い」「注意しようと思っただけ」などと言わず、まず「ごめんね。傷つけるつもりじゃなかった」と、謝ることから始めましょう。それを大人も子どもも確認しあえたら、解決の糸口がきっと広がります。

いじめは、子どもを死へと追い詰めることもある行為です。心を壊されて、人を信じられなくなってしまいかもしれない。考える力も、生きる気力も奪われてしまいかもしれない。このことを、誰もがまず認識してほしい。いじめが被害者の命にかかわる深刻な問題だときちんととらえるためには、「いじめ」と呼ぶのをやめ、「校内虐待」ととらえた方がいいのではないかと考えています。加害者の問題であること、連鎖することも、いわゆる虐待と同じです。いじめは無くならないと思っていたらだめなんです。減らすことはできる、いつか無くせると信じて向き合いたい。



写真は、その後9月29日都内の日本教育会館での様子。
左から、司会の毎日新聞論説委員澤圭一郎さん、
「ストップいじめ!ナビ」代表理事荻上チキさん、
小森美登里、子どもの発達科学研究所・主任研究員和久田学さん、
全国生活指導研究協議会代表笠原昭夫さん、
毎日新聞記者鷲頭彰子さん

◆教員の感想文から

当法人の講演直後に感想文を書いて頂いていますが、今回はその中から教員の方々からいただいた感想文（抜粋）を紹介したいと思います。現場の率直な御意見を伺うことが出来たと感じております。

多くの皆様の参考にして頂けましたら幸いです。

◆ 31才 女性

いじめ問題を考える時には、被害者の姿を注視しがちです。”いじめは加害者問題”という言葉にはっとしました。自分がいじめの現場に遭遇したとしたら、まさしく「～するな」「自分がやられたら嫌でしょ」という言葉がけをするだろうと思いました。

加害者の内面、背景に目を向ける必要性を知りました。いじめを予防するという点から考えてみても、被害者加害者になり得る全ての子の”内面・背景”を理解する努力が一步だと思います。（難しいとは思いますが）まず、少しでも自分が変わるよう、意識を持って子どもたちに接していきたいと思います。

◆ 38才 女性

加害者の背景に寄り添う声掛けというところが勉強になりました。

子どもたちが大人に相談してきてくれた時「どうしていじめられてしまうんだらうね。あなたにも何か思い当たるところあるんじゃないの!？」という言葉は初めて知りましたが、今日の講演で知る事ができて良かったと思います。実際に相談された時、被害者の言葉を否定しないで、被害者責任論を押しつけないことができると思います。

◆ 45才 女性

いじめとは何か考えるよい機会になりました。大人にも十分責任があるのだと思います。子どもを守る社会、学校を作っていくかねばならないと思いました。

◆ 45才 女性

「いじめ」私の認識の中で、負けるな、時が経てばなくなる、自分が強ければ何とかなる、とっていました。何とかならない子どもたちが沢山いるんですよね。

そしてその子どもたちは「いじめを止めてもらいたいんだ」という事を知りました。でも、私の中で止めるにはどうすればいいのかははっきりとわかっていない。

加害者に寄り添うことができるだろうか。

◆ 50才 男性

いじめ問題に対応するとき、教員の立場で相対している自分に気付かされました。

子どもに寄り添い一緒に悩み解決策を探っていこうという気持ちを持っていても、教員である前に人としての自分をもって接していかなければ、いじめを受けている子どもたちに本当の意味で寄り添うことは出来ないのではないかと考えました。教員であることが解決を急ぐあまり被害者責任論的な言葉かけをしてしまったり、傍観者も被害者である視点を見失ってしま

いがちになってしまうからです。今回の講演を聞いて、いじめ問題の本質にふれ、見つめ直す良い機会になりました。

◆ 53才 男性

未だに「いじめられる側にも原因がある」などという話が出てることが悲しく情けないと思いました。

原因だとかそういうことではなく、「いじめによる苦しみ」を取り除いてあげることが一番なのだと思います。

「加害者の問題」、つい加害者に対しては優しい目が向けられなくなってしまいます。

でももう一度、「加害者」の心にも目を向けることが必要であることを認識しなければと思いました。

果たして、相談される大人だろうか。一番自信がありません。でも助けたい想いはあります。いい年ではありますが、変わらねばと思います。

◆ 56才 男性

「いじめ」＝「虐待」であることは、目からうろこが落ちる視点の転換になりました。

言葉の持つ先入観により「いじめ」を軽んじていたことを実感できました。

私も少なからず、その様な認識を持っていたことを恥じるとともに認識を改める良い機会になりました。

◆ 58才 男性

教育の場に務める者として、今日の講演から学んだ教訓を生かしていきたい。

いじめの被害者、加害者、どちらも不幸を生み出してしまふ。その不幸を教育で少しでも取り除いていけたらと思う。

◆ 58才 男性

加害者に対する対応について、厳しさより優しさが大切であるという事を痛感した。

加害者に寄り添うことがいじめをなくすことにつながることを知らされた。

優しい心を持つことができる教育をこれからしていかなければならないと感じた。

いじめは虐待であるという認識をすべての人が持つことによりいじめへの意識が変わると感じた。いじめは被害者も加害者も傍観者もすべてのかかわった人を不幸にする、幸せな人はいない。という言葉が心に強く残った。

本日の講演のことを、これからの教育現場で実践していきたいと思う。

◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日付	主催者	都道府県	都市	人数
2018/9/5	品川区教育委員会	東京	品川	1,280
2018/9/26	豊昭学園・豊島学院高等学校・昭和鉄道高等学校	東京	豊島	750
2018/9/29	毎日新聞シンポジウム「子どもをいじめから守るには」	東京	千代田	100
2018/10/1	神奈川弁護士会司法修習生実務修習	神奈川	横浜	10
2018/10/2	文京区生活指導主任研修会	東京	文京	40
2018/10/3	神奈川県教委中教育事務所PTA人権研修	神奈川	平塚	60
2018/10/9	東大阪市立弥栄小学校	大阪	東大阪	490
2018/10/11	秀英高等学校	神奈川	横浜	300
2018/10/13	江戸川区立第七砂町小学校	東京	江戸川	600
2018/10/16	三浦市青少年問題協議会地区大会	神奈川	三浦	80
2018/10/18	熊本市立花陵中学校	熊本	熊本	490
2018/10/20	真庭市立北房中学校	岡山	真庭	200
2018/10/22	山梨市立後屋敷小学校「子育て講演会」	山梨	山梨	50
2018/10/24	横浜市教育委員会人権啓発講演会	神奈川	横浜	300
2018/10/29	磯子区人権啓発研修	神奈川	横浜	50
2018/11/2	東京都教育庁人権学習指導者研修	東京	新宿	80
2018/11/10	埼玉県弁護士会「子どもの権利」シンポジウム	埼玉	さいたま	150
2018/11/13	糸魚川市立糸魚川中学校	新潟	糸魚川	700
2018/11/14	厚木市立厚木中学校	神奈川	厚木	870
2018/11/16	姫路市立飾磨西中学校	兵庫	姫路	1,000
2018/11/22	北陸学院高等学校	石川	金沢	570
2018/11/27	美咲町立旭中学校	岡山	久米郡	50
2018/11/30	品川区立鈴ヶ森中学校	東京	品川	380
2018/12/4	芳賀教育会指導研究会	栃木	真岡	70
2018/12/5	真庭市立天津小学校	岡山	真庭	60
2018/12/6	倉敷市立玉島北中学校	岡山	倉敷	660
2018/12/7	柏市立南部中学校	千葉	柏	420
2018/12/10	佐倉市立印南小学校	千葉	佐倉	270
2018/12/12	柏市立西原中学校	千葉	柏	580
2018/12/14	川崎市立三田小学校	神奈川	川崎	270
2018/1/16	矢掛町立三谷小学校	岡山	小田郡	80
2019/1/19	NPOぷらっとっほーむ	山形	山形	30
2019/1/22	下関市立王子小学校	山口	下関	660
2019/1/24	備前市立伊里小学校	岡山	備前	130
2019/1/27	美咲町立旭中学校	岡山	久米郡	60
2019/2/14	大田区管理職人権講演会	東京	大田	180
2019/4/11	下関市立長府中学校	山口	下関	460
2019/4/12	下関市立勝山中学校	山口	下関	630